

令和8年度
入学試験問題

第2回

国語

- 1 問題用紙は監督者^{かんとくしゃ}の指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入してください。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点^{くとうてん}や符号^{ふごう}は一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから16ページまであります。

受 験 番 号		氏 名	
------------------	--	------------	--

森村学園中等部

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

どの学校にも、別にはっきりと校則には書いてないし、誰かがそう言っているわけでもないけれど、なんとなくみんなが守っているルールがありますよね。

私の高校では、制服と通学カバンが指定されていました。ただ、サッカー部やバスケット部などに所属している、いわゆる「イケてる」生徒は、それを着崩すことが許容されていました。

(中略)

さて、私は演劇部に属していました。当然ですが、演劇部の生徒に制服を着崩すことが許されることはありません。演劇部は——少なくとも私の高校では——「イケてない」からです。□ I □、私以外の部員はみんなしっかりと制服を着ていました。しかし私は、自分を「イケてる」と思い込んでいたので、その不文律に抗って、制服を思いっきり着崩していました。(中略)

言うまでもなく、私は教室で目を付けられることになりました。「調子に乗っているやつリスト」に入れられ、「イケてる」生徒によって構成される共同体には、参入することが許されませんでした。幸いなことに、私の高校にはいじめがなかったので、特に辛い思いはしなかったのですが、「戸谷君って珍しいよね」という理由から、①「珍太郎」というあだ名をつけられ、「珍さん」と呼ばれて三年間を過ごしました。(中略)

なんで、あのとき私は、わざわざ制服を着崩していたのでしょうか。いま思い返すと、たぶん私は、そこにある空気を破りたかったのではないかと、という気がします。□ II □、この人は制服を着崩して良くて、この人はいけないという、暗黙の了解に従いたくなかったのです。

私たちは、日常生活において、多かれ少なかれ、空気を読んで生きています。それに対して、空気を読めない人は、それだけで鼻つまみ者として扱われてしまいます。空気を読まないことは、たとえ誰も傷つけていなくても、空気を読んでいるというただその理由だけで、まるで悪いことをしているかのように扱われてしまうのです。

でも、なんで私は珍太郎などと呼ばれなければならなかったのでしょうか。

私が制服を着崩していても、教室のなかの誰も困っていませんでした。生活指導の先生は若干困っていたかもしれませんが、でも別に、人を傷つけていたわけではありません。私は、制服を着崩していた以外は、いたって品行方正な生徒でした。エナメルバッグの中に入っていたのは、ナイフや警棒ではなく、無害な高校演劇の台本なのです。

それでも、教室のなかの空気を読まなかった私は、なんだか悪いことをしているかのような扱いを受けていました。私はそこで、誰も傷つけていないわけですから、その悪さは、空気を読まなかったことそれ自体にあるとしたら、考えることができません。(中略)

では、空気を読まないことが、なぜ、それ自体として悪いことになるのでしょうか。

それはおそらく、私が空気を読まないことよって、それまでその教室を支えていた不文律が、いくらか効力を失ったからでしょう。

たとえば、お世辞にも「イケてる」とは言えない私が、制服を着崩していたら、もう「制服を着崩しているのはイケている生徒だけだ」という不文律は機能しなくなります。そしてそれによって、「制服を着崩している」ということは、あの人はイケているんだ」という、不文律から逆算した生徒への評価も、できなくなります。そんな評価が機能停止に陥^{おち}っても、私は何も困らないのですが、たぶん「イケてる」生徒たちにとって、それは困ることだったのでしょうか。

Ⅲ、よく考えてみてください。なんで、「イケてる」生徒だけが制服を着崩すことができ、「イケてない」生徒にはそれが許されないのでしょうか。そもそも「イケてる／イケてない」はどのように区別され、その境界線はどこに引かれているのでしょうか。（中略）その判断を誰がどのようにして行うのでしょうか。そして、その不文律を決めたのは誰であり、それを承認したのは誰なのでしょうか。

そんなことを聞かれても、きつと誰も答えられないでしょう。でも、それは考えてみればおかしな話です。だって、自分でもよくわからないものに、従っていることになるのですから。そしてここに、「空気を読む」ということの興味深い特徴^{とくちょう}があります。すなわち、周囲に同調して行動しているとき、私たちはそのように行動することが正しいという確信を持っているわけではありません。正しいか正しくないかはわからないけれど、とにかく「みんな」がそれに従って行動しているから、自分も同調してしまうのです。

そうであるとしたら、空気を読むことはある意味で恐ろしいものです。なぜなら、^②正しくない行動に対して人々が同調することも、容易に起こりえるからです。

（中略）

そもそも私たちはなぜ空気を讀んでしまうのでしょうか。周りに同調して行動しているとき、私たちには、自分がなぜそうした行動をしているのか、説明することができません。いや、それどころか、自分が空気を讀んでいること自体に、気づかないことさえあるでしょう。（中略）

つまり^③私たちは、空気を讀もうとして、空気を讀んでいるわけではありません。気がついたら空気を讀んでいるのです。なんだか不思議な言い方になっていますが、おそらくそれが事実ではないでしょうか。

こうした現象に対して、極めて鋭い分析^{すまじ}を展開した人物がいます。二〇世紀ドイツの哲学者^{ていがくしゃ}、マルティン・ハイデガーです。

彼は、人間の存在のあり方を二つの種類に区別しています。一つは「本来性」で、もう一つは「非本来性」です。本来性は、人間が自分自身の可能性に従って、自分を理解している状態であり、非本来性は、自分自身ではない可能性に従って、自分を理解している状態です。要するに、自分らしく生きている状態が本来性で、そうではない状態が非本来性、と考えるのであれば、大丈夫^{だいじょうぶ}です。

それでは、私たちは普段^{ふだん}、どちらの状態^{たいせい}で生きているのでしょうか。当然、それは本来性である、と言いたくなります。ところがハイデガーは、日常生活において人間は常に非本来性の状態にある、と言うのです。つまり人間は、基本的にはいつも、自分自身を見失い、自分らしくない形で生きているのです。

それでは、非本来性とは、具体的にはどのような状態でしょうか。ハイデガーによれば、人間は日常において、誰でもない誰かとして、匿名的な「みんな」の一員として存在しています。彼はそうした「みんな」を「世間」と呼んでいます。世間とは、特定の誰かではありません。世間で「こうだ」と言われていることを、誰が言い出し、誰がそれを認めたのかは、まったくわかりません。そうであるにもかかわらず、私たちは世間の一員として、世間のなかに取り込まれてしまっているのです。それは、本書の言葉で言い表すなら、空気を読んでいる状態、同調圧力に支配されている状態に他なりません。

たとえば、教室のなかで同調圧力に支配されているとき、私たちはほとんどの場合、その事実気づきません。そのとき私たちは、かけがえない個人としてではなく、教室のなかの「みんな」の一員、誰でもない誰かの一人として、存在しているのです。しかも、そうなることを望んだわけではありません。気がついたらそうなっているのです。

(中略)

問題なのは、それでは、どうやったらその空気に従わないことができるのか、という点です。前述の通り、同調はしばしば私たちを暴力へと荷担させます。それを回避するためには、同調圧力に対して、何らかの形で脱出することができなければなりません。ハイデガーの概念で言うなら、非本来性の状態を脱却し、本来性を取り戻さなければなりません。しかし、それにはどうしたらよいのでしょうか。

(中略)

たとえば、何らかの難病にかかり、余命が一年だと宣告されたとしましょう。自分に残された時間を自覚した「私」は、今までのように空気を読んで、他の人と同じような生き方をするなどしなんでしょう。きっと、世間から笑われたり、つまはじきにされたりしても、自分がやりたいこと、自分らしいと思えることをやるでしょう。このとき、人間は非本来性を脱却し、本来性を取り戻している、と考えることができます。

とはいえ、人間はいつか死にます。余命が一年か十年か数十年かの違いでしかありません。^④誰も気づいていないだけで、実際には余命宣告された人と同じ境遇にあるのです。そうであるとしたら、私たちは誰だって非本来性を抜け出すことができるはずですが、この世界には、誰一人として、^⑤他者と交換可能な人間など存在しないのです。

高校生活にだって限りがあります。私たちはいつまでも高校生でいられるわけではありません。あるいは明日には事故に遭って死ぬかもしれません。だったら、空気を読んで自分らしさを見失っているなんて、もったいないことではないでしょうか。制服を着崩したいなら、着崩せばいいのです。それでクラスからつまはじきにされたって、別にどうでもよくないですか？

(中略)

思い返してみると、「イケてない」生徒だったのにもかかわらず、制服を着崩し、それによって空気を乱し、珍太郎と呼ばれていたとき、私はなんだか快感を味わっていた気がします。その快感は、たぶん、自分が誰でもない誰かではなく、個性をもった存在であると実感したこ

とで、生じたのではないかと思えます。そう言うと、ちょっと痛いやつのようにも思えます。しかし、ハイデガーの哲学に従うなら、空気を
読まないことができるということは、単なる世間の一員ではないということ、誰でもない誰かではないということの、何よりも証に他なら
ないのです。

おそらく、^⑥そこに空気を読まないことの楽しさがあります。

(戸谷洋志『悪いことはなぜ楽しいのか』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注)

* 不文律………^{あんもく}暗黙の了解^{りようかい}となっている決まり。

問一

I

III

 に当てはまる語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア たとえば イ つまり ウ だから エ また オ しかし カ もしくは

問二 ——— ① 『珍太郎』というあだ名をつけられ、『珍さん』と呼ばれて三年間を過ごしました』について、次の問いに答えなさい。

(1) 筆者は周囲からどのように扱われていたと考えられますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 堂々と校則違反をしていることで反感を買い、誰からも仲間はすれにされていた。
- イ 変わり者だと思われつつも受け入れられて、ひょうきん者として親しまれていた。
- ウ 演劇部であっても制服を着崩すことを許される、特別な生徒として尊敬されていた。
- エ みんなが守っている不文律に抗う異質な存在として、遠回しにからかわれていた。

(2) なぜ筆者の同級生は筆者を「珍太郎」と呼んだのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 筆者を珍しいことをしている変わった人として扱うことで、自分たちが同じ価値観を持っていることを確認し、連帯感を高めるために利用したかったから。
- イ 筆者を教室の中で例外的な存在だと位置づけなければ、制服を着崩しているということはいケている生徒だという評価が成立しなくなり不都合だったから。
- ウ 筆者が周りを気にせず自分らしく過ごしたいと考えていることを理解して、ふつうのあだ名ではなく個性的なあだ名をつけてあげようとしたから。
- エ 筆者が正直に校則を守っている自分たちにはできないことをしているのがにくらしく、ちょっととした嫌味を言わなくては気がすまなかったから。

問三 ——— ② 「正しくない行動に対して人々が同調することも、容易に起こりえる」とありますが、その事例として最も適当なものを次から

選び、記号で答えなさい。

ア 戦時中、日本政府は国家を挙げて戦争に協力させる政策を実行したため、それに従って多くの国民が戦争を支持して協力する態度を示した。

イ 駅のホームで電車を待つとき、前に立っている人がいれば後から来た人は自然とその後ろに立つので、混雑していない時間でも列が形成されることが多い。

ウ 若者がSNSに投稿した迷惑行為がニュース番組で繰り返し報道されることで、中高年の間に現代の若者全体に悪いイメージを持つ人が増えている。

エ 学校で、誰か一人が何かのきっかけで友達をからかいだすと、そのきっかけを知らない多くの生徒も対象の生徒をからかいだすことがある。

問四 —— ③ 「私たちは、空気を読もうとして、空気を読んでいるのではありません。気がついたら空気を読んでいるのです」とありますが、私たちが「気がついたら空気を読んでいる」のはなぜですか。その理由を三十五字以上四十五字以内で説明しなさい。

問五 —— ④ 「誰もが気づいていないだけで、実際には余命宣告された人と同じ境遇にあるのです」とありますが、どのような点において誰もが「余命宣告された人」と「同じ境遇」であると言えるのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 死期がわかっているため、周囲からの評価を気にせずに振る舞える点。

イ 自覚をもって非本来性を脱却し、本来性を取り戻して生きている点。

ウ いつか死を迎えることは確かで、残されている時間は有限である点。

エ 他者と取り替えることができない、この世にたった一人の人間である点。

問六 —— ⑤ 「他者と交換可能な人間」とありますが、これと対照的な意味の語句を本文の —— ④ より前から九字で求め、ぬき出して答えなさい。

問七 —— ⑥ 「そこに空気を読まないことの楽しさがあります」とありますが、筆者はどのようなことに「空気を読まないことの楽しさ」があると述べていますか。「自分らしい行動」という言葉を使って二十字以上四十文字以内で書きなさい。

問八 この文章の内容や表現の特徴の説明として**適当でない**ものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 多くの人に近い経験があると思われる学校での出来事を例に用いることで、読者に親しみを持たせている。

イ ハイデガーの使用した「本来性」「非本来性」という語を使い、筆者の主張を学問的な立場からも裏づけている。

ウ 「私たち」という主語を多用することで、読者を筆者の立場に自然と寄り添わせて共感を求めようとしている。

エ 読者への問いとその答えを繰り返すことで、読者の思考を段階を踏んで整理しながら結論を導く構成である。

〔二〕 小学五年生の岩館まりもは、ある日学校で石本博美に自分の父親を悪く言われる。怒りで彼女に手をあげてしまったことで、まりもはクラスになじめず不登校となる。しかし、近所に住む看護師の貴子が、ランチ（馬を飼い、乗馬などでもできる施設）にまりもを連れ出したことで、まりもは次第に元氣を取り戻していく。そのランチを営む志渡という調教師の男性が、まりもに乗馬を教える師匠である。次の場面は、まりもが厩舎（馬小屋のこと）で作業をしている時に、まりものクラスメイトたちがランチに遊びに来て乗馬を体験する場面である。文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

誰に乗り替わっても同じだった。器用か不器用かのわずかな違いはあっても、馬をまっすぐに動かせる者は一人もおらず、結局は志渡と貴子にすべて預け、曳いてもらって馬場を何周かするのだった。

おしまいには藤原奈々恵の両親がみんなに勧められてまたがり、楽しそうに曳き馬で一周ずつしたところで、志渡が、腕組みをして言った。

「どうだった、みんな」

それぞれが口々に叫んだ。

「むずかしかった！」

「楽しかった！」

「乗ったら高くてびっくりした！」

石本博美だけが知ったふうな口調で言った。

「*メロディはさ、おなcasuしてるから動かなかったんだよ。ちゃんとゴハンもらってないんでないの？」

志渡の眉が、片方だけひよいと吊り上がる。まりもはつぶやいた。

「あ。怒った」

顔は笑っていても、あれは志渡がちよっとカチンときた時の癡だ。カンカンというほどではない、でも細い青筋が一本立っただけの感じ。

「そっかー、あいつ腹へってたんかー」と、志渡は言った。「そりゃ気づかなかったわ。さっきまであーんな広い牧草地に放されてたのに、何にも食べてなかったんかなあ」

① 博美が、ふいっと横を向く。

「それはそうとなあ、みんな。俺、じつはうっかりしてさあ。みんなにまずお手本を見せてやるのを忘れてたんだわ。誰だっけいきなり初めての馬に乗せられて、さあ上手にやれって言われたって、難しく当たり前だよな。ごめんごめん」

「そうだよ！」

と、みんなが ② 図に乗って騒ぎだす。

「お手本を見してくんなきゃわかんないよ！」

志渡が、準備万端という表情で目をあげた。まりもはどきりとした。まるで、こちらがどこにいるかわかっているかのように、通風窓にぴたりと目を据えて大声で呼ぶ。

「おーい、まりも！」

驚いた子どもたちが、みんなして厩舎をふり返った。

「そっちの作業はいいから、ちょっとこっち来て手伝ってくれ」

まりもは、通路に座っているボーダーコーリーを見やった。

「どうしよう、チャンプ」

犬が、黙って首をかしげる。

「まりもー、いるかー？」

みんなに会うのは嫌だったが、石本博美から逃げたと思われるのはもっと癢だった。

まりもは木箱から降りると、深呼吸をした。もう一度、した。それから、思いきって厩舎の扉を押し開け、外へ出て行った。

「おーう、仕事の邪魔してすまん」と、志渡が言った。「あのな、今この子たちをちょっと乗つけてやったんだけど、どうやってたら上手に乗れるようになるのかお手本を見せて欲しいって言うんだわ。まりも、ちょっとやってみせてくれないか」

みんながざわめく。

「うそ。岩館、乗れんの？」

岸田大地が驚いたように言う。

②「どうだろうなあ？」志渡は笑いながら言った。「まりも、こっち来てみな」

石本博美の強い視線が注がれているのを感じた。目を合わせなくても、ものすごく意地悪な顔をしているのがわかる。まりもは懸命に顔をあげて近づいていった。

そばまで行くと、志渡がまるで男同士みたい肩を組んで、そっと耳打ちをした。

「いいか、まりも。俺の言う通りやれ。いいところ見せようとか、いつもと違うことをしてやろうなんて考えなくていい。いつもどおりだ。大丈夫、お前ならできる」

「……ほんとに、そう思う？」

心細くて訊いたのだが、志渡はいつものあの顔で不敵に笑った。

「お前、自分を誰だと思ってる？」

「え、わかんないよ」

「この俺が見込んだ唯一の弟子だべ」

目と目を見合わせる。まりもの喉が、勝手にごくりと鳴った。

「今、貴ちゃんがハミをつけてくれてる」

「あたし、メロデイに乗りたい」

「当然でしょ」と、志渡は言った。「聞こえてたか。腹が減って動かないんだとよ」

「ん、聞こえてた。ばかみたい」

「だな。ほんとのメロデイを見せてやれ」

「——はい！」

まりもは、駆けだした。

(中略)

「常歩なんかもういいしょ。最初から速歩でいってみようか」

「はい！」

声を張って返事をする、まりもはメロデイを柵に寄せ、まず手綱をゆるめておいて、それから脚の合図を出した。ふくらはぎをゆっくり締めていく。いつもなら動きだすのに、メロデイは無反応だ。ごく軽く踵を入れてみる。それでも駄目だ。

前に乗った人たちがみんなして馬をだらけさせてしまったのだった。④ 背中の人間は調教師も同じだ、という志渡の言葉が、今になってつくづくと胸に落ちる。

「なんだよ、動かないじゃん」

誰かの擲擧の声を聞き流し、まりもは背筋を伸ばした。今度は、前よりしっかりと踵を入れる。とたんに、メロデイは目が覚めたように動き始めた。

歩きだしたところへさらに脚を入れると、速歩になる。常歩の（パツカポッコ）というリズムから、いきなり（トットトットトット）になり上下の反動が強くなったのに合わせて、まりもは、一拍ごとにあぶみに立ち、鞍からお尻を浮かせて反動を抜く乗り方に変えた。

ああ、気持ちいい、と思う。志渡から教わる中で、今いちばん気に入っているのがこの軽速歩のレッスンだ。

常歩と比べてスピードがぐんと上がったことに驚いた誰かが、「すげえ、走ってる」と言うのが聞こえた。まだだよ、と胸のうちで呟く。まだこれからだよ。

(中略)

「まりもはタイミングを計り、

(今だ！)

ぼん、と右足の踵を入れて手綱を許した。

もう*かけあし 駆歩かかけあしになつていた。リズムがへパカラン、パカランへ変わる。馬の左の肩がまず前へ出ては地面を蹴ける、左手前。なおも脚を入れていく。スピードがぐんぐん増す。耳のそばで風が鳴り始める。

「すっげー！ 岩館のやつ、すっげー！」

岸田大地が大声で叫んでいる。それに、誰かの「かっこいい」の声。「怖こわくないのかな」の声。藤原奈々恵の両親までが歓声かんせいを上げて拍手はくしゅしてくれている。たった一人、石本博美が⑧ 仏頂面ぶつちやうめんでにらんでいるのを目の端はしに捉とらえて、まりもは思わずいい気分になった。

と、その時だ。左足が、あぶみからすっぽ抜けた。

あつと思った瞬間しゆんかん、体が左に傾かしいだ。とっさに右手で鞍*ぜんきやうの前橋ぜんきやうの突起とつぎをつかんだものの支えきれず、走り続ける馬の反動に宙へ撥ね上げられるようにして、まりもは転がり落ちた。地面と空が逆さになる。コマ送りみたいに落下していきながらも、左手にあるものをぎゅっと握にぎりしめる。

〈落ちても手綱だけは絶対に、〉

放さずにおかげで、背中から砂に叩たたきつけられても頭だけは打たずに済んだ。

人間を引きずっていることに気づいたメロデイが驚いて横つ飛びし、なおも走り出しかけてから思い直したように止まった。

貴子と志渡が、そして藤原奈々恵の親たちが柵をくぐって駆け寄ってくる。その後ろからクラスのみんなまでがこちらへ来ようとしているのが見えて、まりもは慌あわてて手綱から手をほどき、もがくように起きあがろうとした。

「起きなくていい！」貴子が叫ぶ。「頭！ 頭、打たなかった？」

「う……って、ない」

そう言いたいののに、声が出ない。息ができない。そっと横たえて、貴子が膝ひざに頭をのせてくれる。まりもは口を大きく開けて身をよじった。

「かわいそうに、背中打ったんだね。大丈夫だから。体がびっくりしてロックがかかっちゃったの。よしよし、苦しいね、もうすぐ楽になつてくるからね」

胸やおなかをさすってくれる貴子のシャツを握りしめ、吸えない息を必死にたぐりよせながら、まりもは、苦しきよりも痛みよりも、恥はずかしさで死にそうだった。

クラスみんなが、少し遠巻きにして覗のぞいているのがわかる。ああ、情けない。悔くしい。せつかくへお前ならできると言ってもらったの

に、こんなみっともないところを見せてしまうなんて。

突然、掛け金はずれたように肋骨が開き、肺がふくらむ。どっと流れこんでくる酸素を吸いこむと、目尻にじんできた涙がとうとうこぼれ落ちた。

ああ、だめだ、馬場では泣いちゃいけないのに。唸りながら腕でぐいっと拭くと、志渡が、すぐそばに片膝をついた。

「大丈夫か、まりも」

懸命にうなづく。

「ごめ、なさ……」

「なんで」

「あたし……落っこっ……」

「馬鹿、お前。誰にも真似できないくらい上手な落ち方だ。さすがは俺が見込んだだけのことはある」
頭を撫でてくれる志渡の手がむしように嬉しくて、涙がもう一筋あふれる。

「泣いて、るんじゃないよ。これ、ちがうよ、ちがうの」

志渡は笑った。

⑤「わかってるって。いわゆる、心の汗ってやつだよな」

やがて志渡が立ちあがり、貴子がまりもをそっと抱え起こして座らせてくれると、まわりのみんなにようやくほっとした空気が流れた。

「すごいねえ、まりもちゃん」

藤原奈々恵の母親が覗きこんで言った。

「あんなに上手に乗れるなんて、おばさんびっくりしたあ。これまでも落ちたことってあるの？」

「……あります。二回くらい」

「なのに怖がらないでまた乗ろうとするってのが何より凄いよ」

そう言ったのは父親のほうだった。

動くと背中はまだ痛かったが、まりもがゆっくりりと立ちあがり、地面に引きずっていた手綱を拾いあげると、メロディはまるで気遣うかのよう
に鼻面を寄せてきて耳あたりの匂いを嗅いだ。ブルブル、と吹きかけられた鼻息がくすぐったい。

「ごめんね、びっくりさせて」と、まりもは首を撫でながら囁いた。「お前のせいじゃないよ。あたしがへたくそだから……」

「そんなことないって」

ふり返ると、岸田大地だった。

「すげえなあ、岩館。オレ、マジで尊敬しちゃったもん。どれだけ難しいことやってるか、ちょっと乗せてもらった後だからわかるしよ。ほんとうすげえよ」

すると志渡が、すかさず朗らかに言った。

「みんなー、馬のことで訊きたいことがあったら、まりもに訊けー。おじさんより詳しいぞー」

(村山由佳『天翔る』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注)

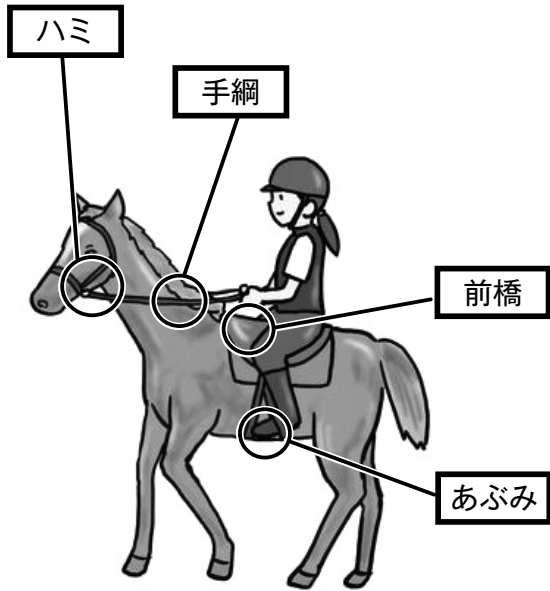
* 藤原奈々恵……………まりものクラスメイトの一人。

* メロディ……………志渡のランチで飼われている馬の名前。

* ハミ・手綱・あぶみ・前橋……………左図参照

* 常歩・速歩・軽速歩・駆歩……………馬を歩かせるスピードの違いによる呼び方。常歩・速歩・駆歩の順に速くなる。

* 擲揄……………皮肉を言ってからかうこと。



問一 ――― ① 「図に乗って」 ――― ② 「仏頂面」の意味として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 「図に乗って」

ア 仲の良い相手に失礼な言い方をして

イ 緊張から解放されて自由に振る舞って

ウ 相手の弱みに付け込む振る舞いをして

エ 思い通りになったと思っただけあがって

② 「仏頂面」

ア 怒りをあらわにした顔

イ 不愛想で不機嫌な顔

ウ 感情が表にあらわれない顔

エ 穏やかに目を細めた顔

問二 ――― ① 「博美が、ふいっと横を向く」とありますが、ここでの博美の様子を説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で

答えなさい。

ア 見ず知らずの大人である志渡に急に話しかけられ、緊張して何も言い返せなくなっている。

イ 志渡に対して嫌味を言ったのに優しく諭されて、子ども扱いされたように感じて怒っている。

ウ 志渡の返答で自分が見当違いの発言をしていたことに気付かされ、気まずさを隠そうとしている。

エ 志渡に自分の意見を真っ向から否定され、クラスメイトの前で恥をかかされたように感じている。

問三 ――― ② 『『どうだろうなあ？』とありますが、この志渡のせりふを朗読するとしたらどのようなように読むのが適当だと言えますか。その説明

として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 周囲の関心を引きつつも、まりもがみんなの前で馬を乗りこなせると確信し、この状況を楽しんでるように読む。

イ 自信がなさそうなまりもに対して一抹の不安を覚えつつも、なんとかみんなの前で成功させてほしいと祈るように読む。

ウ みんなの前で乗馬することに不安な様子のもまりもに対して、プレッシャーを与えないよう笑いながら軽快に読む。

エ 曖昧な言い方をするので子どもたちの興味を引きつけ、まりもの登場をみんなに印象付けるようにもったいつけながら読む。

問四 —— ③「まりもは懸命に顔をあげて近づいていった」とありますが、この時のまりも様子を説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 石本博美から向けられる悪意に気づきひるみそうになりつつも、この場から逃げない覚悟を決めている。
- イ 自分を見下す石本博美に何ができるか試されているように感じ、馬に乗る自信が失われている。
- ウ 石本博美に自分が馬に乗れるはずがないと思われていると感じ、それを見返してやろうとしている。
- エ 自分に敵意を向ける石本博美のことをくだらないと思い、全く気にしていないように振る舞っている。

問五 —— ④「背中の人間は調教師も同じだ、という志渡の言葉」とありますが、この言葉によって志渡はどのようなことを述べようとしているのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア どんなに優れた調教師でも、初めて馬に乗るときはうまくいかないものだという事。
- イ 馬に乗った人間の行動によって、その時々馬の状態は決まってしまうものだという事。
- ウ 初めて馬に乗るときには、人を見せている馬の気持ちを考えることが大切だという事。
- エ 馬はさまざまな人に乗せる中で、信頼できる人を主人だと思えるようになるものだという事。

問六 —— I「目尻にじんんでいた涙がとうとうこぼれ落ちた」・ II「涙がもう一筋あふれる」とありますが、この二つの「涙」には心情の上でどのような違いがありますか。両者の違いを、七十字以上八十字以内で説明しなさい。なお、Iを「前者」、IIを「後者」として答えること。

問七 —— ⑤『わかつてるって。いわゆる、心の汗ってやつだよ』とありますが、ここから読み取れる志渡の様子を説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 失敗したことを恥じるまりもに共感しつつも、つとめて明るい口調で声をかけることで一緒に失敗を乗り越えようとしている。
- イ 失敗を気に病んで流したまりもの涙をあえて茶化すように声をかけることで、まりもと自分との絆の強さを周囲に示している。
- ウ 同級生の前で落馬してしまったまりもの気持ちをくみ取りながらも、冗談まじりの声かけをすることで明るく励まそうとしている。
- エ まりもの言葉を遮って自分の言葉を重ねることで、多くを語らなくても分かり合える父親のような安心感を与えようとしている。

問八 9ページに「まず手綱たづなをゆるめておいて、それから脚きゃくの合図を出した」とありますが、「メロディ」は野生の馬と異なり、人間の合図によって動くよう調教された馬です。それだけでなく、メロディはまりもと長く時間を共にすることで両者の間には特別な絆があることがうかがえます。それが分かるメロディの描写びやうしゃをこれより後の本文中から四十字以内で探し、最初の七字をぬき出しなさい。

問九 本文の登場人物に関する説明として**適当でない**ものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「岸田大地」はまりもの乗馬を見て感動して声を上げるなど、くったくのない素直な感情表現でまりものを後押あとおしする存在になっている。
- イ 「石本博美」はランチに来た時はまりものを敵対視していたが、馬に乗るという未知の経験を経てまりものに心を許すようになっていく。
- ウ 「貴子」はまりものを心配しながらも信用してその様子を見守っており、まりもにとって姉のような安心感をもたらし存在である。
- エ 犬の「チャンプ」や「メロディ」はただの動物ではなく、まりもや志渡にとって自分の思いを理解する友人のような存在である。

三 次の①～⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨～⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① このボールは公式戦のキカクに合っている。
- ② 会社のギョウセキがのびる。
- ③ オクガイの気温は三十度をこえている。
- ④ 仮説をジッショウする。
- ⑤ 父は革製品をバイバイする仕事をしている。
- ⑥ 首相が国をオサめる。
- ⑦ リロ整然と話す。
- ⑧ 弟はアオナに塩のように元気をなくした。
- ⑨ 感極まってなみだを流す。
- ⑩ 栄えある賞をいただく。
- ⑪ この猫は気性が激しい。
- ⑫ 油断は禁物だ。

